



とき 平成11年7月25日

テーマ 「地域連携型法人による

農地保全の実態と課題」

報告者 井上誠司(当研究所・専

任研究員)

めの人的支援システムに

ついて」

講演者 富田義昭(当研究所・研

究顧問)

での助言

講演者 北倉公彦(当研究所・研

究参与)

研究会・研修会等への

報告者・講師の派遣

(平成十一年七月～十一月)

○栗沢町における

農業支援システム検討会・講演

主催 JAくりさわ町

とき 平成11年7月22日

テーマ 「北海道における農業支

援システムの取り組み」

にっしん

講演者 佐伯憲司(当研究所・常

務理事)

○日本農業経済学会・個別報告

主催 日本農業経済学会

○第10回北海道農村生活研究会・

大会・シンポジウム基調講演

主催 北海道農村生活研究会

とき 平成11年9月10日

テーマ 起業化による農村の活性

化

基調講演 「なぜ、いま「農村の活

性化」なのか―その背景

と意義を考える―」

講演者 七戸長生(当研究所・所

長)

○音更町における地域支援検討部

会・シンポジウム・講演

主催 音更町営農対策協議会

とき 平成11年9月14日

テーマ 「『野菜産地形成』のた

○韓・日共同シンポジウム・報告

主催 韓・日共同シンポジウム

とき 平成11年9月28日

テーマ 「中山間地域と農業支援

組織―北海道清水町の事

例―」

報告者 井上誠司(当研究所・専

任研究員)

○平成11年度東欧「農産物市場経

済」コース・研修

主催 国際協力事業団(JIC

A)

支援 帯広市、帯広畜産大学他

とき 平成11年10月13日・20日

テーマ ①「国による農村地域の

社会資本整備」

②中間ディスプレイ

○平成11年度東欧「農産物市場経

済」コース・研修

主催 国際協力事業団(JIC

A)

支援 帯広市、帯広畜産大学他

とき 平成11年10月14日・15日・

11月5日

①「北海道における営農

支援システム」

②「野菜の生産と市場動

向」

③最終成果発表会・ディ

スクリプションでの助言

究顧問)

講演者 富田義昭(当研究所・研

究顧問)



DATA FILE

関連事項 / DATA

北海道庁

〒060-8588
札幌市中央区北3条西6丁目
☎ 011(231)4111

北海道大学

〒060-8589
札幌市北区北9条西9丁目
☎ 011(716)2111

帯広畜産大学

〒080-0834
帯広市稲田町西2-11
☎ 0155(49)5115

北海道立十勝農業試験場

〒082-0071
河西郡芽室町新生南9線2番地
☎ 0155(62)2431

ホクレン農業協同組合連合会

〒060-0004
札幌市中央区北4条西1丁目
☎ 011(232)6170 コントラクター課

北海道農業開発公社

〒060-0005
札幌市中央区北5条西6丁目
☎ 011(271)2231
農地開発センター内

別海町

〒086-0205
野付郡別海町別海常盤町
☎ 01537(5)2111

JAべつかい

〒086-0203
野付郡別海町別海西本町
☎ 01537(5)2201

JA西春別

〒088-2592
野付郡別海町西春別駅前寿町15
☎ 01537(7)2111

JA上春別

〒060-8588
野付郡別海町上春別栄町17
☎ 01537(5)6001

JA中春別

〒086-0652
野付郡別海町中春別南町3
☎ 01537(6)2311

編集後記

台湾中部に発生した大地震は、神戸の震災を越える規模と被害をもたらした。

映像からだけでも、悲惨な状況が伝わり、人間の無力さを感じるが、建物の崩壊もひどいもので、一〇階建て以上のビルが三階くらいまでに、まるで段ボールで作ったようにぺちゃんこになったり、横倒しになっている。一方で震源地の近くの建物でもガラスも割れずにそのまま建っているビルもあった。

設計段階からの欠陥や価格を抑えるための手抜き工事が否定できないのではないかと耐震構造以前の問題が有るように感じられる。素人では判らないだけに、我々にとつても不安といえる。

そもそも 吸湿性のあるコンクリートと鉄筋の組み合わせで、どのよ

うに何十年、何百年と腐食や錆という問題を克服できるのだろうか。まして塩分を含んだ砂でも、どんどん建てていったハブルの頃のビルは心配である。

機械の設計の場合、強度は予測されるひずみの何倍と言っ形で、また耐用年数何年と仮定して試算するが、建物の場合はどうだろうか。機械は入れ替えれば事は足るが住居はそうはいかない。設計者のモラルに期待するだけとはあまりに情けない。

所沢のダイオキシン騒ぎはついでこの間のような気がするが、このときに焼き場から出るダイオキシンも問題になった。人間はすぐに忘れてしまいが、時代のスピードと共に忘れ去られるスピードも間違いなく早まっている。

しかし、先日葬儀に立ち会って、故人に縁の多くの品物を棺に入れる

こと、そして暑い時期だったせいもあるのかも知れないが、大量のドライアイスが用いられていることにびっくりした。ドライアイスが焼却炉の温度上昇を阻害し、副葬品がダイオキシン発生の元になっているとしたら、一人一人は大した量でなくても、世界中で発生する量は馬鹿にならない。死んでからぐらいは、皆の迷惑にならないようにと言っうのは、故人の遺志ではないだろうか。

馬を飼っていて困るのは、馬糞の処理である。以前はいくらでも寝薬用の麦稈(ばっかん)と交換できた。しかし最近はまだでも持たてていってくれる農家が見あたらない。

馬糞は堆積しておくと高熱を発生、切り返しさえやると一年ですばらしい堆肥になる。においも、それほど気にならないので、一般の家庭でも例えばバラの栽培とか、最近流行の

カーデニングに用いることも可能ではないか。

しかし考えてみると牛や馬よりずっと糞沢な物を食べている人間様の排泄物はどうして利用しないのだろうか。確かににおいも含めてイメージは悪いが、大量の水と共に処理される物をコンポストのような形で利用できたら一挙何得かになるのではないだろうか。研究したり発明したりしている人は必ずいると思うが、普及しない原因は何だろうか。

お詫び

「地域と農業」第34号・六三ページの役員名簿で名前の誤植がありました。「向井孝志理事」は「向田孝志理事」の誤りでした。ここに訂正し、お詫び申し上げます。